

高校 国語の学習

1 基礎編

テスト問題用紙

.....

- ・先生から試験開始の合図があるまで、ページをひらかないこと。
- ・問題は、小説 1 問／随筆 2 問／国語基礎力 4 問の計 7 問ある。
 - P 2 ～ P 3 …小説
 - P 4 ～ P 5 …随筆
 - P 6 ～ P 7 …随筆
 - P 8 …国語基礎力
- ・◎印の問いは、本書では問われなかったものである。
- ・解答はすべて、別紙の解答用紙に記入すること。



1

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

——難病におかれ、余命ゼロを宣告された高校生の「私」は、「死ぬまでにしたいこと」を書き出すことにした。そんな「私」の病室に、同級生の「卓也くん」が見舞いに来てくれる。……

こんなくだらないことでいいんだろうか、と自分^①が書いたのに思った。でも、いくら考えても、本質的な欲求は（A）意識の表に出てこない。私は本当は何がしたいんだろう？ 自分が本当にしたいことを明確に把握している人間なんて、一体何人いるんだろう？（ア）

・お父さんに会いたい

二人が離婚してから、お父さんとは一度も「I」を合わせてない。^②そこまで書いて、（B）気がついた。どうしたって、私にこの死ぬまでにしたいことのリストを実行することは、不可能だ。なぜなら、私は病室の外に出ることができないからだ。なんでもそんなことに気がつかなかったんだろう。書いても無駄だ。（イ）

でもまあいい。こんなことに真剣になってもしょうがない。実現するかどうかが重要じゃないのだ。自分の中の欲求を、生きることへの執着を、把握することが大事なのだ、そう考え直した。全部書きだして、一つ一つ、^③殺していこう。自分の中の気持ちを。再び、ペンを走らせる。（ウ）

「それ、僕に手伝わせてくれないか。」

卓也くんは、そんな作業の最中に、（C）私の病室にやって来た。この人、暇なんだろうか、と冷めた心で思う。もうすぐ死ぬ私みたいな人間にかかわって、一体何のメリットがあるんだろう？ 彼の顔は妙に無表情で、^{つか}掴みどころがない。何を考えてるのかわからなかった。私に興味があるとしたら、それは何が理由なのだろう。心の中で、仮説を立てる。これから死ぬ人間に、興味があるから。それならそれでいいじゃないか、と私は思った。別に、不愉快には感じなかった。

「罪滅ぼしさせてほしいんだ。^{*}スノードーム、割ったことの。取り返しをつかないことをしたと思ってる。でも、ごめん、って言葉で謝るだけじゃ、なんか足りない気がして。薄っぺらい、気がして。うまく言えないんだけど……なんでもいい。できることならなんでもするから。」

そう言われて、私は、思いつく。私のかわりに、卓也くんは、死ぬまでにしたいことリストを実行してもらおうというアイデアを。

宙ぶらりんの毎日を、死刑執行の知らせを待つ死刑囚みたいな気分で過ごすことに、私はもう、飽きていた。死ぬことへの恐怖を減らすために、私は可能性を捨てたかった。

人は、過去だけではなく、「Ⅱ」にも囚^{とら}われて生きている。「Ⅱ」を全て捨てることができれば、私は（Ｄ）、心穏やかに死んでいけるはずだ。それで私は、卓也くん^④にお願いをすることにした。

（佐野徹夜『君は月夜に光り輝く+Fragments』）

*スノードーム：ドーム型の透明な容器の中を液体で満たし、人形などを入れた置物。

◎問1 () A～Dに入ることをととして、最も適当なものをそれぞれ次から選び、記号で答えよ。（同じことは二度使わない。）

ア ふと イ また ウ きつと エ なかなか

◎問2 — 線部①について、「書いた」ものを文中から一四字で抜き出し、最初の五字を答えよ。

◎問3 次の一文は、文中の（ア）（ウ）のどこに入るか。記号で答えよ。

・そう気づいて、ペンを止めた。

問4 「」に入る漢字一字を答えよ。

◎問5 — 線部②が指している一文を文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。（記号は一字と数える。）

問6 — 線部③とは、具体的にどうすることか。簡潔に記せ。

問7 「」Ⅱに共通して入ることを文中から抜き出して答えよ。

問8 — 線部④について、何を「お願い」するのが書かれている一文を文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。

2

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

——雪が降る冬の間は超満員になる我が家の庭のえさ台も、春になると客足が遠ざかる。ところが……

ある朝、庭が急にスズメの声でいっぱいになった。見るとえさ台の上には、(A) 見なれた茶色の坊主頭が並んでいるが、^①やまましいのは隣の屋根で、数羽の巣立ちびながうずくまり、翼を小刻みに震わせながら、〈ピーピーチーチー〉鳴きだしている。

羽毛をふくらませているので親より太ってみえるが、全体に色が淡く、くちばしの根元が黄色くて動作も子どもっぽい。親に向かつて「ここにいるよ、お腹のすいたボクはここだよ。」と合図をしているのだろうが、それはそのままわが家と付近の猫たちへの存在証明にもなる。^②私が心配のあまり、ガラス戸にはりついてしまうのは、そのせいである。親スズメは自分の食べるのもそこそこに、細かいパン屑くずをくわえて、最も大仰な身震いをして騒いでいるひなのところに飛んでいき、口移しにそれを与える。^③ひなのばたばたは少しおさまる。えさ台に引き返した親は今度はもっと激しく身震いしている別のひなにえさを運ぶ。数回えさ台と隣家の屋根を往復しているうちに、親がふいにえさの運搬作業を放棄してしまうことがある。

「そうだわ、うちの子たちはもう飛べるんだったわ。」と気づいたのかどうか、ひなたたちの哀願にも「Ⅰ」をかさずに食べはじめる。

子スズメのほうは(B) つれなくなった親の関心を引こうと必死である。覚束おぼつかない飛び方で屋根から金網のフェンスへ、そこからえさ台へ、ジャンプを試みる。^④息をつめて見ていた私もほっとする。新しい世界に飛びたつた子スズメたちが、初めて自力による採餌を始めるだろうと思つて……。あきれたことには、ひなたたちはふたたび身を震わせはじめる。えさ台のパンを「Ⅱ」で踏みしだきながら、自分がどんなに空腹で哀れな子どもであるかを親に認めさせようと黄色いくちばしを開いてみせる。親スズメは愛の衝動に駆られて、思わず足もとのパン屑の一かけを拾って子のくちばしに押しこむ場面もあるが、知らん「Ⅲ」をしていると、きが多い。そのうちに子スズメの中でも兄貴分の一羽が、自分の鼻先にあるパン屑をちよんとつまんでみる。

「おいしいぞ！」もう一度ちよん。

「なんだ。自分で食べるつてこんなに易しいことか。」ちよん。ちよん。ちよん。

私の目にはいつのまにか甘ったれの子スズメが消えて、ういういしい若いスズメが代わりに映る。やがて(C) 幼いひなたたちも、自分がいつまでも子どもぶりをしているも少しも得にはならないことに気がつく。そして次々と巣立ちびなの全員が、大人のス

ズメ社会に溶けこんでいく。私のえさ台は（D）子ズメたちのおあつらえ向きの訓練の場なのであろう。今年もズメの（成
人式）^⑥が終わるまでは、野鳥食堂の営業を続けるつもりである。

（加藤幸子『私の花鳥賦』）

◎問1 （ ） A～Dに入ることばとして、最も適當なものをそれぞれ次から選び、記号で答えよ。（同じことばは二度使わない。）

ア 急に イ たぶん ウ いつも エ もっと

◎問2 — 線部①について、「隣の屋根」には何があるのか。自分で考え、五字以内で答えよ。

問3 — 線部②について、何を「心配」しているのか。具体的に答えよ。

◎問4 — 線部③が具体的に書かれている部分をこより前の文中から三〇字程度で抜き出し、最初の五字を答えよ。

◎問5 「」Ⅰ～Ⅲに入ることばの組み合わせとして、最も適當なものを次から選び、記号で答えよ。

ア Ⅰ…耳 Ⅱ…足 Ⅲ…顔
イ Ⅰ…顔 Ⅱ…羽 Ⅲ…口
ウ Ⅰ…声 Ⅱ…爪 Ⅲ…頭

◎問6 — 線部④の状態の説明として、最も適當なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 窒息して イ 緊張して ウ 期待して

問7 — 線部⑤は「巢立ちびな」のどんな行為を指していったものか。具体的に書かれている連続する二文を文中から抜き出して、最初の五字を答えよ。

問8 — 線部⑥とはどんなことを意味するか、答えとなる一文を文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。

3

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

——私は「咲子^{さきこ}」。幼いころ、小説家だった父を困らせるために、父が書いた原稿を隠したことがある。……

文鎮を取り上げると、再び父の途方にくれた険しい「Ⅰ」が浮かぶ。が、次の瞬間には、「お先^①まつ暗^{くら}だ。」とからかう父の嘲笑^{しょうしやう}が、間断なく押し寄せては「Ⅱ」について離れなくなっていた。

「やつぱり隠そう……。私^②は今、おこっているんだから。」

私は、原稿用紙の厚い束を手にした。しかし、その厚さ、重みに再び逡巡^{③しゆんじゆん}した。

「そうだ、表紙の一枚だけにしよう。そうすれば、お父ちゃんを大して困らせることはできないけれど、叱られることもない……。自分の名案に感動しながら、表紙の一枚を探し始めた。それらしき一枚は、厚い束の中程にあつて、原稿用紙ではなく、硬い方眼用紙であつた。そつと抜き取り、明るい窓辺で隅々まで眺めまわした。赤、青、黄の色鉛筆が、数本のグラフを描き出してあり、落書きのようにも思われた。

「なんだ、お父ちゃんの落書きか……。」

けれど、よく見ると、名前のようなものも細かく列举されていて、他の用紙とちがい、特に丁寧な字体から想像すると、非常に重要な一枚のようにも思われた。私はしばらく、タバコの香りのしみついた書斎の窓辺に立つて考えた。

「まあいいか、これにしよう。これ^④を隠そう。私は今、おこっているんだから。」

方眼用紙を筒のようにグルグルまると、私は、ゾクゾクする興奮で「Ⅲ」^⑤のがわかった。そして、父が、その一枚の紛失に気づくまでの数日間を思い浮かべながら、小躍りをして書斎を出た。

「私を叱らない?」

「チャキは叱られるようなことをしたのか。」

翌日の夜、私は父に書斎へ来るように呼ばれた。書斎の戸を、恐る恐る開けた目の前には、昨日こっそり抜きとつて、私の机の引き出しに隠してあつたはずの方眼用紙が、壁に貼られてあつたのである。

「これはね、小説構成表というものでね、ものすごく大切なものなのだよ。この表を基にして小説を書き進めるんだ。横が時間を表して、つまりページ数、縦は登場人物や場所、事件……。」

父は私に背を向けたまましゃべり続けていた。私は、兄たちと争うように食べた庭の無花果いちじくのせいで、口の周囲にできた小さなた、
だれが、^⑦ずきずきと疼うずいたのを覚えている。

(藤原咲子『父への恋文』)

◎問1 「Ⅰ・Ⅱに入ることばの組み合わせとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア Ⅰ…眉 Ⅱ…口 イ Ⅰ…顔 Ⅱ…耳 ウ Ⅰ…目 Ⅱ…頭

問2 — 線部①の「先」には、別のどのような意味が込められているか。次から選び、記号で答えよ。

ア 前 イ 幸 ウ 咲

問3 — 線部②について、私は何に「おこっている」のか。それが書かれている部分を文中から一八字で抜き出し、最初の五字を答えよ。(記号は一字と数える。)

◎問4 — 線部③の意味として、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 考え直した イ ためらった ウ 不安になった

◎問5 — 線部④について、「私」はどこに隠したのか。文中から八字で抜き出して答えよ。

◎問6 「ⅠⅢに入ることばとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 唇が震えてくる イ 顔が青ざめてくる ウ 頬が紅潮してくる

◎問7 — 線部⑤の意味として、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 舞い上がって イ 忍び足で ウ 大喜びして

◎問8 — 線部⑥について、「抜きとつ」た時に感じた感覚を文中から八字で抜き出して答えよ。

問9 — 線部⑦に込められた「私」の気持ちとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 用紙を隠したことへの後悔 イ 書斎に来たことへの後悔 ウ 無花果を食べたことへの後悔

問10 右の文章を二段に分けるとすれば、後段はどこから始まるか。後段の最初の五字を答えよ。(記号は一字と数える。)

4

次の各問いに答えよ。

A 次の短歌の（ ）に入る適当な動植物名をそれぞれ下から選び、記号で答えよ。

- ① 春さむき（ ）の疎林^{そりん}をゆく鶴^{つる}のたかくあゆみて枝をくぐらず 中村 憲吉^{けんきち}
 ② （ ）は哀^{かな}しからずや空の青海のあをにも染まらずただよふ 若山 牧水^{ぼくすい}
 ③ 金色^{こんじき}のちひさき鳥のかたちして（ ）散るなり夕日の岡^{をが}に 与謝野 晶子^{よさの あきこ}
 ④ （ ）の髭^{ひげ}のそよるに來る秋はまなこを閉^おちて想ひ見るべし 長塚 節^{ながづか せつ}
 ⑤ 高槻^{たかつき}の梢^{こずえ}にありて（ ）のさへづる春となりにけるかも 島木 赤彦^{しまき あかひこ}
- オ イ ウ エ ア
馬追虫^{うまおひ} 梅^{うめ} 白鳥^{しらとり}

B 次のことわざの（ ）に入る生き物をア～オから選び、記号で答えよ。また、完成したことわざの意味をa～eから選び、それぞれ記号で答えよ。

- ① えびで（ ）をつる ア 猫^{ねこ} a 非常に仲が悪い。
 ② （ ）の甲より年の功 イ 鯛^{たいて} b 有力者の権威をかさに着る。
 ③ 虎^{とら}の威をかる（ ） ウ 犬^{いぬ} c 少しの元手で多くの利益を得る。
 ④ 借りてきた（ ） エ 狐^{きつね} d 平素と違っておとなしい。
 ⑤ （ ）猿の仲 オ 亀^{かめ} e 長年の経験は貴重だ。

C 次の四字熟語の意味をそれぞれ下から選び、記号で答えよ。

- ① 一日千秋 ア ほとんど。
 ② 二束三文 イ 喜んだり心配したりする。
 ③ 十中八九 ウ 数が多くて値段が安い。
 ④ 四分五裂 エ 待ちわびる様子。
 ⑤ 一喜一憂 オ ばらばらになる。

D 次の――線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直せ。

- ① 保留 ② 能率 ③ 拍車 ④ 素朴 ⑤ 妄想
 ⑥ ヤクソクを守る。 ⑦ 弁当をジサンする。 ⑧ 客をアンナイする。 ⑨ 事故ボウシの対策。 ⑩ セイジツな人柄。